慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評 : 大石裕著『メディアの中の政治』勁草書房、2014年
Sub Title	
Author	山口, 仁(Yamaguchi, Hitoshi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2015
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.20 (2015. 7) ,p.138- 143
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次のタイトル : 「書評 : 大石裕著『メディアの中の政治』」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20150704-0138

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：大石裕著

『メディアの中の政治』勁草書房、2014 年

山口　仁

本書は、長年にわたりマス・コミュニケーション論、ジャーナリズム論、政治社会学の領域で研究を行ってきた著者が、政治コミュニケーションに関する近年の論考を大幅に加筆・修正しまとめ上げた学術書である。本書は、同著者の『政治コミュニケーション（1998 年・勁草書房）』と『ジャーナリズムとメディア言説（2005 年・同）』の問題関心を強く受け継いでいる。

本書は、ジャーナリズムの活動（社会的な事件・出来事を選択的に取材し、ニュース素材にしたあと編集・整理し、ニュースとして社会に提供する活動）に作用する権力（影響力・圧力）に着目する。そしてこの権力の作用を三つの側面から論じる。一つは、社会的な規制や規範、政治エリートや一般市民といったジャーナリズムの外部から働く影響力である。二つ目は、ジャーナリズム組織やジャーナリストが内面化している慣習、倫理、規範、制度などの内部から生じる影響力である。三つ目は、これらの影響力の下で活動するジャーナリズムそれ自体が有する影響力である。ジャーナリズムはその活動の過程で、社会的出来事の意味づけ・評価を行い、その意味づけを正当化する価値観を社会に明示的・暗示的に示し、そして読み手がそれを受容する。この一連の過程では「本来多様なはずの価値観が競合あるいは対立し、それが一様化（ii）」していく。著者はここにジャーナリズムの権力性を見出す。

本書は、理論編（第一章から三章）と事例編（第四章から七章）から構成される。**第一章「ジャーナリズムと権力」**では、主に「権力」概念について検討が行われている。ただし、それは一般的なジャーナリズム批判（マス・メディア批判、メディア評論）で用いられている「権力」という概念とは大きく異なる。ジャーナリズム批判では、権力といえば政治権力のことであり、ジャーナリズムはそのような権力に対峙し、それから独立することが求められる。このような素朴な権力観に対し、本書は、権力を経済権力、政治権力、強制権力、象徴権力などに分類し、さらに権力を悪しき力としてではなく「影響力としての権力」と禁欲的に捉える。もちろん国家機構がそれらの権力に関して顕在的な優位性を有していることを認めつつも、本書は潜在的な権力行使（いわゆる「不可視の権力」）にも目を向け、ジャーナリズムと権力の新たな関係を明らかにする。その上で、政治エリートとジャーナリズム、マス・メディア組織・業界とジャーナリズム、世論とジャーナリズム、社会の集合的記憶やニュースの物語とジャーナリズム、といった様々な社会的主体や事象とジャーナリズムとの関係を論じる。そして様々な社会的要素が（影響力としての）権力を行使しあう状況を、著者は「さまざまな権力の網（31 頁）」と呼ぶ。本書は、ジャーナリズムをその網の中で活動するものと位置づけている。

第二章「ニュースの物語分析」では、ニュース・テクストを「物語」という概念で分析する

山口仁「書評：大石裕著『メディアの中の政治』」
『三田社会学』第 20 号（2015 年 7 月）138-143 頁

視座を示す。著者は、「過去に生じた出来事の知覚に関して解釈による変形を加えること（36頁）」を物語行為とし、ニュースの生産がまさにその物語行為の一種であるとする。そして物語を「技法的物語」と「価値的物語」とに分類する。前者は出来事が生じた時間的配列やある出来事が別の出来事を決定する因果の流れのこと、後者はニュース生産の過程で行われる情報・物語の取捨選択、関連付けの過程で入り込む価値観のことを指している。そしてニュースに含まれる価値観は、社会の支配的な価値観の影響も強く受けている。著者はここに「不可視の権力」の作用を見出す。つまり、ニュース生産・受容の過程において作用する物語（ニュースの価値的物語）は、社会において支配的価値観となっている常識や慣習、集合的記憶、ヘゲモニー、集合的アイデンティティによって構成される「大きな物語」、すなわち社会全体で共有されている解釈枠組の体系とも相互に関係しているというのである。ニュースの物語は社会の大きな物語に一部規定されつつ、逆にニュースの物語が社会の大きな物語に影響を与え、変容させうることを著者は想定しているのである。「（不可視の）権力の網」は、このような多層的な物語のあり方も規定している。

第三章「メディア・フレームと社会運動」では、コミュニケーション効果研究におけるアジェンダ設定モデル、送り手研究におけるゲートキーピング研究、権力に着目する批判的コミュニケーション研究、ニュースの言説分析・物語分析をフレーム概念に依拠しながら整理し直すことによって、既存のメディア・コミュニケーション研究における著者の理論的な立ち位置を明確化している。ここでいうフレームとは「出来事の構成要素の選択や抽出、さらには出来事それ自体の意味づけという一連の作業を行う際の基準（63 頁）」のことで、価値観やイデオロギーに支えられている。ただし、本書は一部の批判的コミュニケーション研究のように、政治エリートや文化エリート（もしくは経済エリート）によって一方向的にメディアのフレームが決定されているという見解はとらない。メディアのフレームは社会を構成する人々が共有するフレームとも共鳴しながら形成されていることを本書は強調しており、この点で、単なる体制批判のジャーナリズム論とは一線を画している。そして、社会（の人々が共有する）のフレーム、各種エリートのフレーム、メディアのフレームが共鳴しながら、再生産、ときには変化していく様相を分析する手段として、言説分析の可能性が提示される。そこでは、まさに網の目のように幾重にも織られたフレームの存在が想定されている。さらに、本章では社会運動（特に「新しい社会運動」と呼ばれるもの）が、そのフレームの共鳴のあり方（そして「権力の網」）を変える可能性についても論じている。

本書の理論編に共通する特徴があるとすれば、権力の網、物語の多層性、（多様な）フレームの共鳴、といった表現に示されるように、社会における権力（影響力）の行使過程を線的なものではなく、面的なもの、立体的なものとして捉えようとしていることである。ともすれば既存の価値観を再生産するものとしてとらえられがちな「権力」、「物語」、「フレーム」といった概念を、それが変容する側面についても論じようと試みている。この点が、再生産の側面に重きを置きすぎた結果、社会の変容を例外や奇跡として捉えがちな類似の議論と大きく違う点で

ある。この問題関心は前二作にも見られるが、本書ではより明確に示されていると思う。

事例編となる**第四章「世論調査という『権力』」**は、マス・メディアが実施し、公表・報道する世論調査をメディア・テクストとしてとらえる。そして朝日新聞と読売新聞がそれぞれ実施した「自衛隊のイラク派遣」に関する世論調査とその報道を事例に、メディア・テクストとしての世論調査が有する権力性について考察している。本章は「ジャーナリズムは世論調査を提示することにより、社会の意見の分布である世論という『現実』を構築し、構成するのである。とくに、マス・メディアが自ら実施する世論調査は、その結果がマス・メディアによって公表されることを前提に設計・実施され、世論動向や政策過程に対し影響を及ぼす可能性が大きい（112 頁）」とし、マス・メディアの有する権力性を考察するための重要な研究資料や対象としてマス・メディアの実施する世論調査をとらえる必要性を説いている。

第五章「水俣病報道の『物語』」は、1950 年代の日本社会において支配的価値観であった経済発展優先の発想（つまり当時の日本社会の「大きな物語」）が、水俣病事件報道の物語化にどう寄与したのか論じている。水俣病事件報道の歴史は、その内容によっていくつかの時期に分類できるが、本章では初期の報道（1950 年代）で構成された事件の物語を中心に扱う。初期の水俣病事件は、確かに社会的紛争として報道されたが、それは「漁民」と「警察」という対立で描かれた（てしまった）。その結果、漁民騒動が「終結」すると、水俣病事件も「解決」したかのように報道され、それが被害者たちの意識や運動にも影響を及ぼしたのである。このような水俣病事件の物語化が、その後 8 年も続く報道空白期（第二期：1960～1968 年 8 月）をもたらした。またこのような物語の形成には、公平・中立性を重視し、客観的な報道をするべきであるというジャーナリズムに期待される価値観が加担していたことも合わせて指摘されている。

第六章「水俣病報道と労働運動」でも、前章と同様に水俣病事件の物語化が論じられている。ただ、本章では水俣をめぐるもう一つの社会的紛争が水俣病事件を徐々に後継に退かせていく、すなわち、ある争点が別の争点を駆逐する状況について論じている。1960 年代初期、チッソ水俣病工場では大きな労働争議（いわゆるチッソ安定賃金闘争）が起こっていた。この争議が起こる前に九州では、戦後日本社会を象徴する労働争議である三井三池争議が生じている。安賃闘争は、水俣病とは異なり新聞でも大きく取り上げられた。それは当時の日本社会において労働問題が大きな社会問題として認識されていたこと、そして社会問題の報道を使命とする新聞もまたこの問題を取り上げることに前向きだったからである。しかし「経営者対労働組合」、「旧労働組合対新労働組合」といった対立の図式は、一方で「チッソ対水俣病患者」という別の地域紛争、公害問題・紛争を潜在化させていった。このように本章では、社会の支配的な価値観とそれに対抗する価値観という単純な二項対立図式ではなく、複数の対抗的な価値観の間の関係や対立に目を向けた考察の必要性が強く主張されている。

第七章「沖縄地方紙がつむぐ『記憶の網』」では、沖縄の「慰霊の日（6 月 23 日）」をめぐる新聞報道に関して沖縄の地方紙報道を中心に分析している。沖縄問題における「対立」といえば、戦争、米軍基地をめぐる本土と沖縄の意識の差である。その意識の差を本章では、「慰霊の

日」をめぐる朝日新聞と琉球新報、沖縄タイムスの比較分析を通じて描いている。そこには基地問題について、沖縄戦を中心とする戦争に関する「記憶の網」の中でつねにとらえようとする沖縄の地方紙とそうではない本土の新聞の違いが明確に表れている。

事例編に関しては、潜在的には多様、多元、多重であるはずの紛争・対立のうち、何が顕在化し、何が潜在化したのか、もつれた「（多様な主体による）権力の網」を丁寧に解きほどきながら分析が進んでいく印象を強く受けた。

「洗練」された理論と「大きな」社会問題の分析のために必要だったもの

本書は全体にわたって、ニュースの言説分析を通じて社会のあり方を分析するというスタンスが貫かれており、その点でも著者の前二作との連続性は強い。しかし、著者は本書の「あとがき」で以下のように述べている。

> これらの章（第一章から第三章：引用者）では新たな視点をいくつか提示してはみたが、前掲の二冊（大石 1998、2005：引用者）で展開した理論をはるかに超える水準に到達することはできなかったというのが率直な印象である。同じ場所をぐるぐる回ってしまったのかもしれない（234 頁）

確かに、本書で示された権力論に関する議論は『政治コミュニケーション』、言説分析に関する議論は『ジャーナリズムとメディア言説』にそのエッセンスが多分に含まれているし、またフレームの変化の可能性、物語の多層性という視点についても前二作の中にその萌芽が皆無だったとはいえないだろう。

しかし、異なる領域を出自とする概念・理論を大胆に整理し、それをまとめ上げていく手腕は、前二作よりも洗練されていると思う。特にフレーム概念を既存のコミュニケーション研究の文脈で説明しつつ、それを社会運動論と結び付け、さらに第二章までの権力論、物語論と架橋していく第三章の論理展開には「理論を纏めるとはこういうことなのか…」と唸らされた。理論研究とは、えてして新奇な概念・視座に注目が集まりがちである。しかしその実、それまでの研究の焼き直しですらないというものも多々ある。似たようなことを別の概念で説明しているだけ、逆に同じ用語を使いながら別のことを説明しているだけ、というように。本書はそうした理論研究にありがちな陥穽とは無縁である。

また著者はこうも述べている。

> 戦後日本社会が抱え続けてきたこれらの問題（憲法問題、公害問題、沖縄基地問題：引用者）や争点の大きさ、根深さ、そして参照すべき資料や文献の多さに圧倒され続けてきたというのが偽らざる気持ちである（234 頁）

これについては、もはや著者個人の問題ではないだろう。現状、ジャーナリズムと社会問題を総合的に論じることができている研究が果たしてどれくらいあるだろうか。時事評論やジャーナリズム批判としてならばともかく、社会科学の研究レベルでそれが十分に行われているとは言い難い。その問題を認識したうえで、戦後日本社会の「大きな」社会問題の事例分析に取り組んだ著者の姿勢は、高く評価されなければならない。

そして「大きな」社会問題という難題の事例分析に取り組むためには、分析枠組の洗練・精緻化が不可欠である。借りものの概念・理論では、分析を全うすることはできない。著者の前二作と比べて、本書が日本の「大きな」社会問題に直に向き合うことができたのは、理論のこうした「洗練」があったからこそではないだろうか。となると、著者が「ぐるぐる回って」と表現する一種の足踏みのような状況は、仮にそうだとしても本書のような事例分析のためにはむしろ必然だったのではないかと思えてくる。

それでも、理論編に関し「（前二作を）はるかに超える水準に到達することはできなかった」という著者自身の指摘が気にならないわけではない。その理由を推察するに、それは著者が政治社会学者であることに関係しているのかもしれない。著者は、本書を含む三部作を通じて政治社会学を専門としながらも、『政治コミュニケーション』ではコミュニケーション、メディア、文化などに注目し、また『ジャーナリズムとメディア言説』では文学理論や言語理論などを取り入れてきた。一方で、著者は政治（社会）学（とくに政治過程論のあたり）の領域の問題関心をつねに手放さない。確かに、現実構成論（や社会的構築主義）や言語に関する様々な議論には広い領野が存在する。だが、それらの中には推論に推論を重ねて生みだされたような理論・概念もある。著者はそうした領域に安易に踏み込もうとしていない。もっとも「（前二作の）理論をはるかに超える水準」は、おそらくその方面にはないだろう。むしろ、著者が軸足を置いている政治社会学の中にそれがあるのではないだろうかと個人的には考えている。

社会問題報道（ジャーナリズム）はどう分析されるべきなのか

以上のように本書の功績を認めつつも、個人的にもう少し踏み込んだ記述が欲しかったと思う部分がないわけではない。それは現在の日本の研究環境におけるメディアの言説分析のあり方に関する著者の総括である。今世紀になってから、言説分析は日本のメディア・コミュニケーション研究では一定程度受け入れられてきたし、言説分析のための手法もある程度確立してきた。だがその反面、「安易な」言説分析が大量に生み出される問題も顕在化してきたのではないだろうか。この点について、歴史社会学の領域で言説分析を行った赤川は、以下のような指摘をしている。

> 言説が現実がそのような形で構築されているのかを説明する段階では、ほぼ例外なく、分析者が前提とする権力や支配構造、政治的利害といった変数が自明視される。つまり現実の被構築性（＝恣意性・可変性）を指摘する一方で、自らが構築した説明変数の恣

意性や可変性には目を向けようともしないのである。マルクス主義やフェミニズムを問わず、堕落したイデオロギー分析は、おおむねこのような傾向に陥りやすい（赤川 2005、136 頁）

（批判的）言説分析とは、言説の編制を規定するもの（構造、価値観、物語など）を推定する研究手法である。しかし言説分析は、数量分析と異なり、分析対象の代表性を明確に示しにくい。そのため、ともすると研究者自身が勝手に思い描く「大きな物語」を説明するために分析を行うという誘因が働きやすい。この点について、著者は「言説分析や物語分析は、（新しい）社会運動が民主主義理論、そして民主主義社会にとって両義的であることをまずは認識し、そのうえでメディア・フレームについて論じる必要がある（84 頁：傍点は引用者）」と、禁欲的ではあるが、見方によっては踏み込んだ記述をしている。「何のための言説分析なのか」、「言説分析はどう行われるべきなのか」という問いは、たとえば自己反省の社会学や社会構築主義論争における議論のように、学問論の一種として論じられる傾向にある。著者はそのようなメタレベルの問題について明確には語らずに、分析を通じてそのあり方を体現してみせている。しかし欲をいえば、言説分析の「陥穽」について、明示的見解を提示した考察が読みたかった。それがメディア言説分析の第一人者（の一人）に求められる責務であると言ったら、言い過ぎであろうか。

ともあれ、こうして洗練された理論による「大きな」社会問題の分析の書がこうして世に出た以上、同様の研究分野の末席にいる者としては、まことに身が引き締まる思いがしたということをここで告白し、書評に代えさせてもらいたい。

参考文献

赤川学.2005.「言説の歴史を書く」盛山和夫ほか編『＜社会＞への知/現代社会学の理論と方法（下）』勁草書房.125-144 頁.

大石裕.1998.『政治コミュニケーション』勁草書房.

———.2005.『ジャーナリズムとメディア言説』勁草書房.

（やまぐち　ひとし　帝京大学）